

AUGUST OFFICIAL HANDBOOK

2018 NEWYEAR

千の刃濤 桃花染の皇姫

* 千の刃濤、桃花染の皇姫 ショートストーリー

竜胆の一族

安西秀明

* 新作情報

あいりすミステリア!
～少女のつむぐ夢の秘跡～

千の刃濤、桃花染の皇姫 CS版

* スタッフ対談

＊まえがき

Introduction

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

さて、ついにオーガスト最新作

『あいらずミステリア!』がサービス開始!となっているはずですが
(この前書きを書いている12月上旬はまだ稼働前ですが)。

世界観構築、キャラクターデザイン、CG、

シナリオ、音楽などを全てオーガストが担当し、

監修や一部キャラクターデザインのみ提供といった形ではなく

「完全新作」として制作してきましたので、

皆様にお楽しみいただければ何よりです。

また同じく、『千の刃濤、桃花染の皇姫』のPS4版とVita版も

12月21日に発売されている予定です。

なるべく広いお客様に『千桃』の世界と物語をお楽しみいただけるよう、

また、なるべく皆様にとって便利な端末でお楽しみいただけるよう、

これからもこういった展開は続けていければと考えております。

どうぞよろしくお願いたします。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、

オフィシャルハンドブックをお楽しみください。

2017年12月 オーガスト/ARIA スタッフ一同



AUGUST OFFICIAL HANDBOOK 2018 NEWYEAR

- 3 千の刃濤、桃花染の皇姫 ショートストーリー
電胆の一族
- 8 あいらずミステリア! ~少女のつむぐ夢の秘跡~ 好評稼働中!
- 9 千の刃濤、桃花染の皇姫 CS版 好評発売中!
- 10 スタッフ対談
- 11 あとがき

竜胆の一族

安西秀明

「今日より鴉田家の養子に入ることになった。名は宗仁という。よろしく頼む」

お父様に連れられてきた男子が、そう言つて頭を下げた。

お父様が「宗仁は武人だ」と仰つているけど、突然のことで私は頭が真っ白。

宗仁と名乗つた男子は精悍な顔つきで、武人らしい雰囲気だ。私より年上だろうけど、まだ大人じゃない。お母様の背中に隠れてびくびくしているのと、目が合った。

「そちらは奏海殿だろうか？」

「は、はい」

名前を呼ばれたけど、慌てて目をそらす。男子に真っすぐ見つめられるなんて、初めてだったから。

☆

一人っ子の私が女子であるため、鴉田家には跡継ぎが存在しなかった。

鴉田家は七本刀にまで数えられていたが、数代前に除名。さらには家督問題をも抱えてしまったのだ。

そんな時、養子になったのが宗仁様。

屋敷の玄関でいきなり挨拶をされてから、数日が経った。

宗仁様の振る舞いは、礼節をわきまえ過ぎてくるくらいだ。それに剣の腕も確か。『鴉田家が七本刀に再振される』という噂まで出ているらしい。

でも、宗仁様は自分から何かを語ったりはしない。家族であるはずの、私にさえ。だからこそ距離を感じてしまう。……宗仁様はまだ、ここが自分の家だと思えていないのかも。

「もつと、仲良くなりたいな」

正直、兄と呼べる人ができて嬉しい。優しいお兄様

がいたらなあ、つてよく妄想してたから。

理想のお兄様は凛とした武人で、でも優しく、褒めてくれて、甘えさせてくれて……えへへへ。

「つて、だめだめ！ 妄想に浸つていいのは寝る前だけ！」

お盆に載せた朝餉を運びながら、気を取りなおす。今日の献立は、鯖の塩焼きに出汁巻き卵、葱の味噌汁にお漬物。

『おいしい料理を振る舞つて宗仁様に構ってもらおう作戦』の準備は完璧。これで距離を縮めて、さりげなく自然に『おにいさま』つて呼べるといいな。

居間を覗くと、縁側に座る宗仁様の背中が見えた。

「宗仁様、朝餉をお持ちしました」

「ああ、今日は奏海殿が調理を？」

振り向いた宗仁様が落ち着いた声で言う。

「は、はい、お母様には及ばないかもしれませんが、あの……お、おいしく、作りましたので！」

「なぜ慌てている？」

「なぜでしょう、あはは」

うう、宗仁様の前に立つと緊張して慌ててしまう……ちゃんと話したいのに。がつくりしながら朝餉を並べると、宗仁様が味噌汁に視線を落とした。

「よい香りだ」

「どうぞ、お召し上がりください」

「では、いただきます」

ここで味噌汁の作り方を解説して、他の料理も紹介して、順番に味わってもらつて、最後に褒めてもらつて……！！

「……ふう、美味しい。奏海殿、味噌汁をもう一杯いただけるだろうか」

「全部飲んでしまわれたのですか!? お味噌汁だけ!?」

順番にお料理を楽しんでもらう計画だったのに！

「すまない、あまりにも美味かった」

「では、おかわりを持ってまいりますね！」

褒めていただいたから良しとしましょう！

ふわふわと浮き立つ気持ちを抑えながら、味噌汁のおかわりを持つてくる。足りも軽くなり、危うく量で足を滑らせそうになった。

「奏海殿は朝から元氣だ」

「やんちゃで騒がしいと、よく叱られています……」

赤面した顔を見られないよう、俯いた。

「いや、奏海殿くらいの年なら、それで丁度いい」

「ごっごつとした温かい手のひらが、頭の上に乗った。ありがとう、奏海殿。味噌汁のおかげで、今日の稽古にも身が入る」

私の頭を優しく撫でてくれる宗仁様。溶けだしてしまいたいほど、身体が熱くなっていく。



「……すまない、つい手が。奏海殿が、落ちこんだ子犬のように見えたのだ」

「珍しく慌てた様子で、宗仁様が手を引っこめる。」

「いえ、私も嬉しゅうございました。なのでお気になさらず！」

首をぶんぶん左右に振った。……今なら、言えるかな。

「料理もお褒めいただき、ありがとうございました、おに……宗仁様」

あーん！ やっぱ緊張して言えなかった！ もうちょっとで『おにいさま』って言えたのに！

その後も頑張って『おにいさま』と呼ばうとしたけど、見事に空回り。どこか距離のある宗仁様を前にすると、どうしても緊張してしまふ。

朝餉を食べ終えた宗仁様が、お茶を飲みながら庭に目を向けた。

「お庭が気になりますか？」

「竜胆の花を見ていた。よく手入れされているようだ」

「鴛田家の家紋である竜胆車、その由来となっている花ですか」

鉢から伸びた幾本かの竜胆が、花を咲かせている。上向きに咲いた青紫色の花弁には、凛とした美しさがあつた。

「竜胆は群生せず、一本ずつ咲いていく孤高の花。花言葉も少し切なくて、『悲しんでいるあなたを愛する』というものがあつた」

「……確かに、切ない花言葉だ」

「宗仁様、お花が好きなのですか？」

「いや、竜胆に親近感が湧いた。孤独な者どうし気が合うのだろう」

自分のことを孤独だなんて……宗仁様はもう、鴛田家の一員なのに。やっぱり宗仁様は、ここが自分の家だと思っていないんだ。どうすれば、宗仁様はちゃんと家族になってくれるんだろう。

竜胆を眺める宗仁様が、とても遠く感じた。



稲生家の明義館に通うのが、鴛田家の通例だ。養子である宗仁様も毎日、明義館で稽古を積んでいる。そして、宗仁様の稽古を勝手に見守るのが私の日課。お昼過ぎになって家事が落ち着くと、今日もまた道場へ向かう。

武人町を少し歩くと稲生家の屋敷が見え、武道場からは木刀を打ち合わせる音が聞こえた。

……よし、発見。木刀を握って仕合をしている。……よし、発見。木刀を握って仕合をしている。

「頑張つて、宗仁様」

宗仁様は正眼の構えを崩さずに相手を直視している。強い気迫を発し、見ているだけで倒れてしまえそう。

相手の武人も気圧されたのか、構えたまま半歩後退——したと思つたら、宗仁様の木刀が喉に突きつけられていた。

相手の武人が降参し、互いに一礼。私から見ても宗仁様の圧勝。

「宗仁様、格好いい……はっ、勝手に声が！」

だ、誰にも聞かれてないよね？ 慌てて周囲を見る。「え？」

——榎家の当主、榎数馬様。

道場に向かってくる。けれど、どうしてここに？

稲生家が武人の棟梁であることを、榎家は快く思っていない。だからこそ、榎様が明義館に来るのは異常だ。

早く許ちゃんと刻庵様に知らせないと。あ、でも今日は帝宮に行つて……じゃあ誰に？ 宗仁様？ でも、でも、

あたふたしているうちに、榎様の巨体が横を通り過ぎる。邪魔そうに私を一瞥してから、大腿で道場に入つていった。

「何だ、刻庵は留守かよ」

榎様の野太い声に武人たちが驚き、静止する。「……なら、好きにやらせてもらうか。おい、鴛田の養子つてのはどいつだ」

身体がびくりと震える。どうして、宗仁様を。宗仁様が恐れる様子もなく歩み出した。

「鴛田宗仁と申す。榎殿、何用でしょうか」

「ただのガキじゃねえか。こんなのを養子に取るたあ、

かつての七木刀も落ちるとこまで落ちたもんだ」

「……っ！」

「木刀を寄せ越せ。仕合だ」

「他門との仕合には当主の許が必要。申し訳ないが目を改めていただきたい」

「鬱陶しい決まりだな。それとも、単に鴛田家が錆刀になつちまつただけか？」

錆刀。臆病な武人を指して言う、屈辱的な侮蔑。私は拳を固く握りしめ、榎様を追うようにして道場へ踏み入る。

突然の乱入者に、榎様や他の武人は怪訝そうだ。宗仁様は黙って私を見つめている。

「ああ？ 誰だお前」

「榎様。鴛田家への侮辱、今すぐ撤回してください」

仰ぎ見るようにして榎様を睨む。榎様は不愉快そうに片眉を吊り上げたが、すぐに得心のいつた顔で頷いた。

「お前、鴛田の娘か……なるほど、こいつは都合がいい」

「何の都合がいいというのです」

私の疑問に答えず、榎様は薄ら笑いを引っこめた。そして、仇敵を睨むような顔になる。

「おい、鴛田の娘。わかつてんのか？ 武人の邪魔をするなら、覚悟をしくちやいけねえぞ」

刃のように鋭利な声色。喉元に刀を当てられたような気がして、膝が震えだす。べたりと座りこんだ私を見下ろし、榎様のため息をついた。

「震えやがって、それでも武人の子か。やっぱり鴛田の血は錆びついてやがる」

「榎殿、これ以上はお控えいただきたい」

「気つく、宗仁様が間に入つていた。家を侮辱された上、宗仁様に守つてもらうなんて……自分が情けない。」

他の武人たちも、険しい顔で榎様を囲んでいる。「……ここには頭の堅い奴しかいねえのかよ」

榎様が面倒そうに舌打ちした。放つていた殺気を霧散させ、私たちに背を向ける。

「近いうち、試させてもらうぜ。鴛田のガキ共」

意味のわからない言葉を残して、榎様は去つていく。

恐怖と悔しさの涙で視界がにじみ、私は唇を噛んだ。



「あ、あの、重くはないでしょうか？」

「軽すぎるくらいだ。奏海殿はもつと食べたほうがいい」

腰を抜かしてしまつた私は、宗仁様におぶわれて帰路についている。身体が密着しているせいで、さつきから自分の心臓がうるさい。

「宗仁様、今日は情けないところをお見せしました」「武人が相手なのだから仕方ない。むしろ、よく一度でも立ち向かえたものだ」

横様の顔と言葉を思い出すと、また身体が震えそうになる。同時に、悔しさも湧いた。錆刀とまで言われた挙げ句、膝をついてしまうなんて。

「悔しいか、奏海殿」

「い、こめんなさい」
 悔しさのあまり、宗仁様の肩を握る手に力が入っていた。

「大丈夫だ、奏海殿。鴛田の血は錆びてなどいない」「え？」

「普通の人間でありながら、丸腰で武人に立ち向かう。これほどの気概を持った者の血が、錆びてなどいるものか」

「ですが横様の言う通り、鴛田家は七本刀から外され……」

「些細な話だ。平凡な地位であろうと、立派に戦つた武人を何人も見てきた」

数十年も生きてきたかのような口ぶりだ。でも、不思議と説得力がある。

「それに万が一、鴛田の血が錆びているのなら……俺たちが研げばいい」

宗仁様の一言で、心の中に渦巻いていた情けなさが溶け消えた。

錆刀と侮蔑されようと、錆びた刀はまた研げばいい。どうして気づかなかつたのだろう。

きつと、今まで私は何もしてこなかつたからだ。鴛田家の現状を憂うばかりで、立ち向かつたり、戦つた

りしなかつた。自分は武人じゃないから仕方ないと、心のどこかで思つていた。

でも、それは違う。私だつて武人の……鴛田の血を受け継いでいるのだ。刀は握れずとも、鴛田の誇りのため、できることがあるはず。

「それに、奏海殿が戦うというならば共に戦おう。それが養子に入った者の役目だ」

「役目、ですか」
 義務的な言い方に寂しくなる。本当の家族なら、役目なんて言葉は口にしないはず。

宗仁様は大切なことを気づかせてくれた。こんな人が兄だつたらつて、ずっと思つてきた。だから私は……宗仁様とちゃんと家族になりたい。鴛田家の家族になつて良かったつて、宗仁様にも思つてもらいたい。

「そういう時は『役目』と言わず、『兄だから』の一言で良いかと思ひます」

「なるほど。次からそう言うおう」
 「約束ですよ」

宗仁様から離れたくなくて、首に回している腕に少したけ力をこめる。宗仁様が、くすぐつたそうに身体を揺らした。



翌日、私と宗仁様は陵墓がある丘へ散歩にやつてきた。ここは代々の皇帝が眠っている、皇国民の聖地。私たちは陵に竜胆の花を供えた。

丘から天京の街を眺めれば、川向こうにある武人町が見下ろせる。

「宗仁様、あそこ、私たちのお家が見えますよ」
 「ここからだど、ずいぶん小さい」

「本当ですね、ふふっ」
 さりげなく『私たちのお家』と口にしたのが嬉しくて、つい笑みがこぼれた。宗仁様が不思議そうな顔をするけど、それすらも楽しい。

「宗仁様、この後は買い物に——」
 「よっ、兄妹そろつて墓参りか」

突然の声に空気が張りつめる。とっさに振り返ると、不敵に笑う横様の姿があつた。腰には二本の木刀を差

しており、片方をいきなり宗仁様に投げる。
 「探したぜお前ら。まあ、道場から引つ張り出す手間は省けたか」

「横殿、何用か」
 木刀を受け取つた宗仁様が前に出る。沸々と湧く怒りを抑えながら、私は横様を睨んだ。

「仕合だよ。お前を負かして、鴛田家の威信に止めを刺す」

「そこまでして、鴛田家を排斥する理由をお聞きしたい」
 「同じ武人として腹が立つんだよ。七本刀からの除名なんて失態を晒しやがつて」

横様が木刀の切っ先を私たちに向ける。
 除名されたのは数代前の話。でも、そんな反論に意味なんてない。

「奏海殿、離れていってくれ」
 「……はい」

出来ることなら助太刀したいけど、私では足手まといにしかならない。せめて震えることなく、鴛田の者として毅然としていなくては。

宗仁様が、静かに木刀を構えた。
 「仕合を受ける気になつたな。養子に入れたもらつた義理か？」

「いえ、兄だからです」

兄だから——。宗仁様は昨日の約束を守つただけかもしれない。それでも私は、胸が満ちるのを感じた。

宗仁様は鴛田家の長男として、私の兄として、戦つてくれるのだ。

「横殿。負けた際には、鴛田家への侮辱を撤回していただきます」

「考えておいてやる」

横様も木刀を構えた。宗仁様は強いけど、三祖家の一角を担う横様も強い。私は折るような気持ちで宗仁様を見守る。

二人が睨み合つたまま、数秒。
 冷たい風が吹き、丘に生えている草木を揺らした。

柔らかな葉擦れの音が重なり、波のような音韻と化する。風が去ると共に、再び静寂が訪れ……横様が消えた。

瞬間、木刀の乾いた音が響く。



わんばかりに構えを解く。

「横殿、仕舞いです」

「待て、何だ今のは。どうやって俺の木刀を折った。まさか鎌ノ刃——」

「自分は素振りをしただけです。単に、木刀の手入れを怠っていたのでは？」

「……くそっ、納得いかねえ。こんな事なら呪装刀を持つてくるんだっつぜ」

物騒なことを言い、横様が折れた木刀を睨む。

「横殿、侮辱を撤回するという約束です」

「……養子のためえが強いだけじゃ、足りねえんだよ」横様が鋭い眼光を私に向けた。

「家名を汚され、養子に戦わせ……それでも腰を抜かしてるとんなら、ためえの一族の血は、武人に不要だ」横様の視線には、人を射殺せそうな気迫が宿っている。だが、ここで退いてはいけない。私は誇り高き鴛田の娘。

宗仁様は鴛田家のために戦ってくれた。ならば私も、鴛田の血を研がなくては！

真つすく横様に歩み寄り、背筋を伸ばして正対する。

「横様といえど、これ以上、鴛田家を侮辱することは許しません」

「昨日も言ったが、武人の邪魔をするなら覚悟をしろよ」

横様が折れた木刀を向けてくる。これが真剣であっても、私の覚悟は揺るがない。

「私を斬りたければご自由に。私は鴛田家の娘、死なば恐れるに足りません」

横様にまた一歩近寄る。突きだされた木刀の先が、肩間に触れた。

「ここで死ぬなら、それも本望。家名を侮辱されて逃げるくらいなら、家名を背負って散りましょう」

「……震えもせず、武人に啖呵を切るか。昨日の今日でえらく変わったな」

横様が折れた木刀を懐に仕舞った。

「強いのは、あの養子だけじゃねえようだ」

「横様、武人ならば約束を果たしますよう」

「俺には俺の詫び方ってもんがあるんだよ」

鬱陶しそうに手を振って、横様が丘を下りていく。

横様の大きな背中が見えなくなつてから、私は深い吐息をついた。

「奏海殿、見事な胆力だった」

頭の上に、宗仁様の大きな手が乗せられる。その温もりが、緊張していた身体をじんわりとほぐしてくれた。

「やはり、鴛田の血は錆びてなどいなかったな」

「はい。鴛田家のため、宗仁様と共に戦えたこと、誇りに思います」

これで鴛田家の威信が戻るわけではない。けれど、臆さずに戦つたという誇りは満足感となつて胸に広がっていった。

それに、宗仁様との距離も縮まった気がする。宗仁様も、同じように思ってくれているといいな。

後日、驚きの報せが鴛田家に届いた。

「七本刀に再披露……！ もちろん嬉しいのですが、急すぎて同じくらい驚きが……」

「親父殿も同じことを仰っていた」

庭の竜胆に水をやりながら、突然の報せについて宗仁様と相談する。

「どうやら、稻生家と横家の推薦があつたらしい」

「ま、横家まで？」

あの横様が鴛田家を推薦してくださつたということ？ ますます意味がわからない。

「あの時に言つていた、横様なりの詫び方という事でしようか？」

「そうかもしれないな。『試させてもらう』という言葉も気になるが」

確かに、横様は道場でそんなことを言っていた。

「臆測だが、俺たちは本当に試されていたのかもしれない」

「試されていた？ 一体、何を……？」

「横殿は最初から、鴛田家を七本刀に戻そうとしていた。そのために、鴛田家が七本刀に相応しいかどうか……今一度、見極めたかった」

「だから、私や宗仁様を挑発していた？」



慌てて見れば、二人が鏝迫り合いの格好になっている。一瞬のうちに横様が距離を詰めたのだ。

これが武人。常人では目で追うことすら困難。そのまま二度三度、木刀を打ち合わせる。

横様の太刀筋は剛剣と呼ぶに相応しい。一振りごとに激しい風切り音がして、宗仁様の木刀を折つてしまいつ。

対する宗仁様の剣は静かだ。構えを変えず、機を見て鋭い斬撃を放つ。

横様の突きを躲して、宗仁様が後退した。

「鴛田の武人は、戦場でもそうやって逃げるのか？ 打つてこいよ、錆刀が」

「……その誘言（ほうげん）、これで最後にしていただく」

宗仁様の纏う空気が変わった。木刀を上段に構え、そのまま宗仁様が静止する。時が止まったかのような緊迫感が満ち、呼吸すらも忘れた。

横様とは距離があつて木刀は届かない。けれど、宗仁様は何かをする気だ。

天に掲げた木刀。宗仁様が、それを一気に振りおろす。

「なっ!？」

横様の声と、何かの碎ける音が重なつた。見ると、横様の木刀が半分に折れている。

な、何が起こつたの？ 宗仁様は、勝負あつたと言

宗仁様が重々しく頷いた。

横様の言動を思い返してみると確かに、宗仁様の強さや、私の心構えを確かめていたように思える。

「横様は、どうしてそのような事を」

「同じ武人として、鴉田家の状況を憂いていたのかも知れない。本人は認めないだろうがな」

横様にお礼を言いたいけれど、何もしないのが一番みたい。

私たちは涼しげに咲く庭の竜胆に目をやった。

「そういえば、ご存知ですか？ 竜胆には『正義』と『誠実』という花言葉もあるのですよ」

「鴉田家に相応しい、立派な花言葉だ。……いや、養子である俺が言うのも、おこがましいか」

「そ、そんな事はありません！ 宗仁様は鴉田家のため、共に戦ってくれたではありませんか！ 『兄だから』と、言ってくださってではありませんか！ 養子であろうと、もはや宗仁様は立派な鴉田家の一員……」

言葉の奔流は止まらず、今まで溜めこんでいた思いが溢れだす。

宗仁様は少しだけ驚いた様子だったが、何も言わずまた竜胆を見つめた。

「……宗仁様。竜胆はそれぞれに咲く寂しい花です。けれど、寄りそって咲く彼らは家族のようにも見えます」

共に咲くことはできずとも、竜胆は並んで花を揺らしている。

「私たちが本物の家族のように、兄妹のように、寄りそうことができるのではないのでしょうか」

宗仁様の肩がびくりと動いた。だが、それ以上の反応はない。

「……宗仁様とは、家族になれないのかな。」「どうやら俺は、人の情をまだ理解しきれていないらしい」

宗仁様が静かに話します。声には、どこか懐かしむような響きがあった。

「奏海殿の兄として戦っている時、忠義とは別の熱を感じた。忠義よりも柔らかく、穏やかな熱だ。そうか、あれが……家族の、兄妹の情というものか」

独り言のように語る宗仁様。ここにいない誰かに話しているようにも聞こえた。

「人の情を解する努力をしろ」……心から家族や兄妹と呼べる存在がいれば、俺にも情が理解できるだろうか」

言葉の意味はわからない。けれど、宗仁様の顔には穏やかな色が浮かんでいる。

そのまま、自然に私の頭を撫でてくれた。

宗仁様から、今までにない温もりを感じる。お父様やお母様と過しているときに感じる、家族の温もりだ。

今まで、どこか距離のあった宗仁様。その距離が埋まって、ようやく家族になれた気がした。

「奏海殿。今更だが、言葉にしておこう。俺は鴉田家の長男……鴉田宗仁だ」

「はい……宗仁様は鴉田家の長男、鴉田宗仁様でございます！」

宗仁様と私に血の繋がりは無い。けれど、私はこの温もりが好きで、宗仁様を本当の家族だと思っている。

「これからも私の家族で……私の兄でいてくださいね、お義兄様」

ようやく、宗仁様のことを『おにいさま』と呼べた。緊張も恥ずかしさも無い。だって、今の宗仁様には家族の温もりを感じるから。

「勿論だ。俺は奏海の兄だから」

「は、はい！ お義兄様！」

奏海！ 『奏海殿』じゃなくて『奏海』って呼んでくれた！

「えへへ、お義兄様？」

「どうした、奏海」

呼び合うだけで、幸せが胸から溢れそう。

「お義兄様！」

「奏海」

「お義兄様!!」

「……すまない、気恥ずかしくなってきた。稽古に行かせてくれ」

「そんな！ 私はまだ物足りません、お義兄様！」

庭の竜胆が風に揺れる。

竜胆は群れて咲くことのない、孤独の花。けれど、寄りそう花々は家族のようで……とても幸せそうだった。

完



▼ AUGUST × DMM GAMES

あいらす・ミステリア!

～少女のつむぐ夢の秘跡～

アイリス
芽吹きを待つ者がつむぐ学園RPG 好評稼働中!!

タイトル あいらす・ミステリア! ～少女のつむぐ夢の秘跡～ **プラットフォーム** PCブラウザ (DMM GAMES よりログイン)

キャラクターデザイン・原画 ベっかんこう / 夏野イオ **シナリオ** 榊原拓 / 内田ヒロユキ / 安西秀明

音楽 ActivePlanets **CG着彩** ベべる / ひろた / 巻道 / 弥弛 他 **背景美術** ベべる

©2017 DMM GAMES / AUGUST

あいらす・ミステリア! 樹理学園へようこそセット

～少女のつむぐ夢の秘跡～

フルカラーのキャラクター紹介や世界観紹介、裏設定や開発秘話が満載のブックレットをはじめ、音楽アレンジCD、特製布製ランチマットやゲーム中で使用できるアイテムコードが収められた、初回限定生産のスターターパックです。

「あいます!」はインストール作業の必要がなく、PCブラウザがあればどなたでもすぐにお楽しみいただくことができる作品ですが、このセットがあればより深くゲームをお楽しみいただけること間違いございません。

初回限定版♡価格 **6,800** 円(税別)

発売日 **2017年11月15日**



ARIA

奮い立て宗仁。私のために。

千の刃濤 桃花染の皇姫

せんのはとう
つぎえめのこうき

PlayStation4/PSVitaにて12月21日発売

出演声優 宮国朱璃 仙台エリ * 鶴田奈海 戸板優衣 * 椎葉古杜音 高森奈津美 * 稲生諳 中島沙樹 * エルザ・ヴァレンティン 尾崎真実 ほか

シナリオ 榊原拓 * 内田ヒロユキ * 安西秀明 ほか **原画** ベっかんこう * 夏野イオ

『千の刃濤、桃花染の皇姫』が PlayStation4 / PSVita に登場。

昨年9月に発売されたオーガストの最新作、『千の刃濤、桃花染の皇姫』がPlayStation®4とPlayStation®Vitaに移植されます。Vita版は携帯機ならではのどこでもプレイできる利便性、PS4版はPC版を上回る高解像度により更なる美麗なCGがお楽しみ頂けます。パッケージ版にて豪華特典付きの限定版がラインナップされているほか、PSStoreにてDL版も同時発売。未体験の方は、ぜひこの機会に忠義と愛のADVをお楽しみ頂ければ幸いです。

※ 初回限定版 特典

- | | | | |
|---------|-----------------------|---------|---------------------------|
| 特典
1 | アレンジ音楽CD
千桃編案集-幽翠- | 特典
2 | 特典小冊子
千桃クロニクル-遊戯場の章- |
| 特典
3 | 特製ランチョンマット
皇国の昼餉 | 特典
4 | 特製キーホルダー
古杜音のラバーキーホルダー |



製品概要

初回限定版価格 * 9,980円 税別 通常版価格 * 5,980円 税別
発売日 * 2017年12月21日 プラットフォーム * PlayStation4 / PSVita 制作 * ARIA

※ゲーム本編内に新規シナリオや追加CGなどはございませんので、PC版をお持ちの方はご注意ください。

スタッフ対談

べっかんこう×榊原拓

#46

2017.12.7 16:30 社内にて

べっかんこう(以下「べっ」) さあ、今回も対談の時間がやってまいりました!

榊原拓(以下「榊」) まずは皆様にご報告が。長年、冬コミに合わせて作り続けてきた『クリスタルカレンダー』の製造ですが、今年から取りやめることとなりました。

べっ ああ、その話はしないです。理由としては、金型が限界になっていて本体セットの土台部分のクオリティを保つのが難しくなってきたことと、原価がどんどん上がってきていたこと、あたりがメインです。金型先輩頑張った!

榊 思えば最初にあの形のカレンダーを作ったのは、PS2版の『夜明け前より瑠璃色な』の初回限定版の特典で、2006年でした。

べっ 長く作ってきましたね。楽しみにしてくださいだった皆様には申し訳ないです。会社でも、会議室に置いてあったりして便利だったんですけどね。

榊 累計個数は何個になったのかな……ええと……5万8千個くらいですね。最初のPS2版を合わせると10万個を越えてました。たくさん作ったなあ。

べっ これまでの長年のご愛顧、ありがとうございました! 来年はまた別の形で卓上カレンダーをお届けできればと思います。

榊 さて『あいミス』ですが。

べっ お待たせしました。サービス開始しました! わー!

榊 わー!

べっ 対談の時点ではまだですけどね!

榊 そうなんですよねー。これを読んでいる皆様はもうプレイしていただいているのでしょうか。

べっ 楽しんでもらえてるといいのですが。

榊 この対談が載る小冊子が配られてる頃、どんな評判になってるのかドキドキです。

べっ ですねえ。僕らもまだアドベンチャーパート以外はプレイしてません。

断片的には見てるんですが、総合的なゲームバランスはプレイしてみないとわかりませんからね。

榊 その辺を最後ギリギリまで詰めてるような話を聞いています。

べっ サービス開始後も良くできるところはどんどん改良していけるといいですね。

榊 そして僕らは今、ちょっと先に実装される予定の、シナリオや期間イベントを作っています。

べっ リリース後も結構やるのがたくさんあってなかなか一息つく間もないですね。

榊 お正月は休めるんですか?

べっ 僕ら2人も、大晦日まで有明にいるのは確定ですが!

べっ お正月くらいはゆっくりしたいですね!

榊 僕は毎年、田舎に新幹線で帰ったりしてけっこうバタバタしてる印象ですねえ。

べっ 僕は実家に帰って犬と戯れてきます。三が日プラス木金休みにしたので大型連休ですよ!

榊 犬と戯れるのいいですねえ。

べっ ボールとか投げたり、わしゃわしゃしたり。

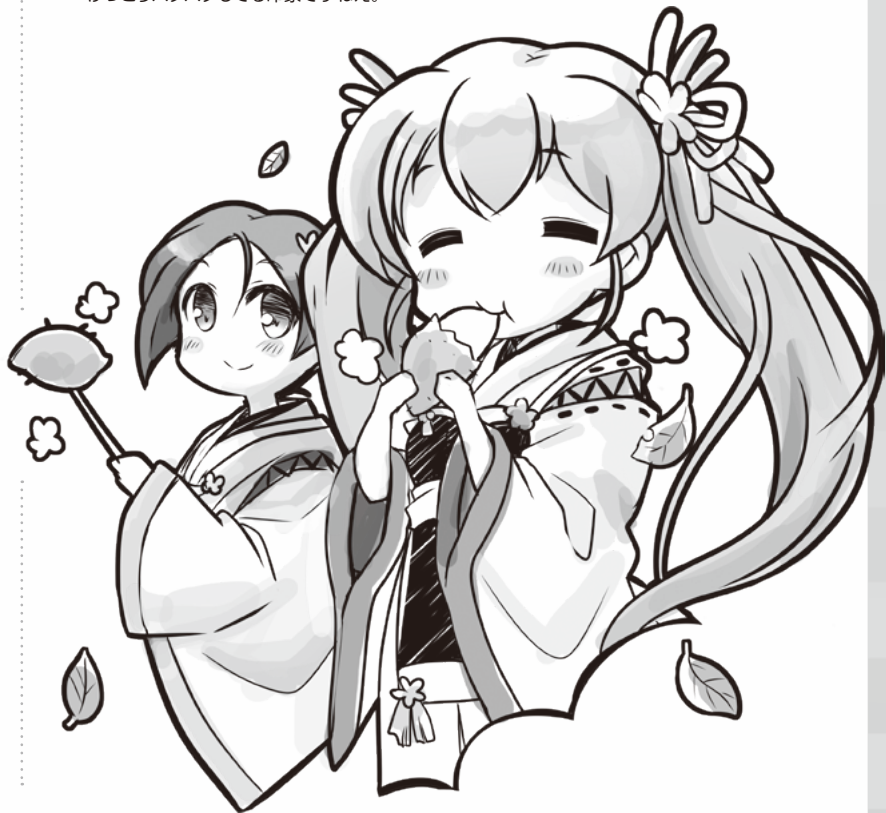
榊 おお……羨ましい。

べっ あとはゲームしたりプラモ作ったりしてのんびりしたいと思います。

榊 僕は買って積んである本の山を消化しないと。Kindleは積んでる実感がなくてヤバイです。

べっ あとは、初詣とか行きたいですねー。初笑いに寄席に行くのとかもいいな。

榊 三が日過ぎたあたりで一緒に行きますか!



* あとがき

Postscript

オフィシャルハンドブックをお読みいただき、ありがとうございました。
お楽しみいただけましたでしょうか。

『あいらすミステリア!』は、現在本編の物語の制作と、
追加のキャラクター、そして期間イベントの制作に取り組んでいるところです。
サービス開始時点でのオーガスト担当コンテンツは既に完成しているので、
稼働前の現段階では、無事に『あいます』のサービスが離陸していることを信じるのみ。
オーガストとしては久しぶりの純粋ファンタジー作品
(エルフィン等の垂人が出てくるファンタジーは初めて!)なので、
もしまだ未登録の方がいらっしゃいましたら、
ちょっと世界観を覗く程度でも、触れてみていただければと思います。

また、2018年1月26日には、Android版の『大図書館の羊飼いが』発売を迎えます。
もちろん「より楽しんでいただける内容のゲームを作る」というのが
ソフトハウスにとって最も大切なことではありますが、
「より多くの方に触れていただけるよう、様々なプラットフォームで
プレイできる環境を整える」ことも次くらいに大事であると考えています。
寝転がりながら、または外出先でのプレイなどを考えると、
やはりスマホやタブレットは便利な端末です。
様々なシーンでお楽しみいただければ幸いです。

今後も皆様にお楽しみいただけるゲームを作っていければと考えておりますので、
オーガストをどうぞよろしくお願いたします。

2017年12月 オーガスト/ARIA スタッフ一同



あいらすミステリア!
~少女のつむぐ夢の秘跡~

* AUGUST OFFICIAL HANDBOOK 2018 NEWYEAR

企画・制作



<http://august-soft.com/>



<http://aria-soft.com/>

当小冊子の一部のページを撮影し、ブログ・SNS等に転載していただくことは問題ございません。*全ページを複製配布することはご遠慮下さい。



AUGUST OFFICIAL HAND BOOK
2018 NEWYEAR